

「へへ、そんなら、だったら、そうできや……でも……」

結局致庸は何も言うことができず、しかたなく雪瑛の美しい切れ長の瞳を見つめ返した。この美しいまなざしの中にずっと留まっていたくてたまらなかつた。致庸はずっとにやにやしていたが、その黒々と煌めく瞳にはあふれんばかりの情熱が込められていて、雪瑛は急にはにからんだ笑みを浮かべると、うつむいて小さな声で言った。

「しょうがない人、一緒に太原府に行くのはいいけど、明日の夜明け前までには、長栓に家まで送らせてよ。もし明日の朝になってわたしがいないことに両親が気づいたら、生きてはいられないわ！」

致庸は躍り上がった。

「わかった、だったら明日の夜明けまでだ、長栓、馬車をもつと急がせてくれ！」

馬車はさらに速度をあげて走った。雪瑛は一本指で致庸の額を軽くこづいた。

「おばかさん、ほんとにしよわない人」

致庸も笑って雪瑛の手をとった。

「ほんとに不思議だよ、会ったが最後離れるのが嫌になってしまった。最初はちよつと回り道して顔を見るだけのつもりだったのに、顔を見ってしまうと、今度はしばらく一緒にいたくなつてしまふし、馬車に乗ってくれたら、今度は太原府まで連れて行きたくなつてしまふんだ。もつともつと一緒にいたくなるんだよ。一番いいのはね、一番いいのは、永遠に離れないことだよ」

雪瑛は恥ずかしくてたまらなくなつて、手を取り戻そうともがいたが、致庸はしっかりと握りしめてじつと見つめてくる。ふたりの視線がからまって一瞬のうちに千言万語にも等しい思

いが交差する。雪瑛はゆっくりとうつむくと、致庸が手を握るにまかせた。しばらくして雪瑛は長いため息をついた。

「早く言っちゃうだ、わたし気がかりでたまらないわ！」

「なにが気がかりなんだい？ わかった、わたしが合格しないんじゃないかって心配なんだらう？」

致庸はおどけてボンと腹を叩いた。

「この腹の中は八股文で一杯なんだよ、臭くて鼻が曲がりそうなくらいさ。挙人になるんざ赤子の手をひねるがごとしだ。今度の試験が殿試じゃないのが残念なくらいだ。試験問題も聖人の言葉じゃないしさ。もしこれが殿試で、試験問題が聖人の言葉なら、わたしは見事な答案を仕上げて、今上陛下だってわたしを状元にせずにはいられなくなるのに！」

雪瑛は大風呂敷を広げる致庸に思わずクスツと笑うと、再びうつむいて黙り込んだ。致庸は雪瑛が何やら思い悩んでいる風なのを見て、あれこれと質問責めにした。雪瑛は追いつめられて目に涙を浮かべると蚊の鳴くような声で言った。

「致庸、あのね、最近のうちの事情は知っているでしょう？ 父の商売がうまくいっていないの。今となっては財産と言えるほどのものは、娘のわたしぐらいしか残っていないのよ！」

致庸はびっくりした。

「何を言っているんだ！ おじさんがそんなことなさるわけ……」

雪瑛はうなずいて、さらに声を低めた。

「父が言ったの。いまは商売の元手すらないんですって。一家で飢え死にするわけにはいかな

いから、わたしをどこかお金持ちの家にお嫁にやって、元手を借りて阿片館を開くって言うの」

致庸はわざとせっぱ詰まったふりをした。

「ほんとうに？ それできみはうんと言ったの？」

雪瑛が怒って手を振り払うと、致庸はすぐになだめにかかった。

「わかったわかった、いいかいお嬢さん、何にも心配なんかしなくていいんだ。喬致庸は今日太原府で郷試を受ければ、あつという間に挙人になるんだよ。万一ちよつとばかり辛抱することになったとしても、いずれは都で殿試を受けて、合格したら進士だよ。進士になれば、官僚になる資格が得られるばかりか、兄さん嫂さんにお願いして江家に結婚の申し込みに行ってもらうことだってできるんだ」

雪瑛は飛び上がって致庸の手を握りしめた。

「ほんとうに？」

致庸は雪瑛の手をしっかりと握り返して真剣に言った。

「あたりまえさ。おじさんとおばさんさえ反対しなければ、この縁談は決まったも同然だ。だれも二人を離ればなれにすることはできなくなるよ。喬家は別に大富豪ってわけではないけど、でもおじさんに商売の元手として数千両を貸してあげることぐらいどうってことはない。でも阿片館を聞くって言うのはどうかと思うけどね」

雪瑛は喜びのあまりあふれた涙を顔をそむけて手巾で拭った。致庸は雪瑛の注意をそらすために急いでその肩を押した。

「雪瑛、ごらん、ごらんよ、外はとっても綺麗だよ！ 長栓、馬車を停めてくれ、降りてちよつ

とぶらぶらするから」

太原の郊外では、一面の野の花が日の光を浴びてのびのびと咲き乱れていた。鳥の声は澄み渡って心地よく、数頭の金色の蝶が野生のレンゲソウの上をひらひらと飛び交っている。雪瑛は小さな少女のようにわくわくした。

「致庸、ここはほんとうに綺麗ねえ、この場所、前に夢で見たことがあるわ！」
致庸はちよつと不思議そうに言った。

「そうなんだよ。わたしもそう思ったんだ、わたしも夢でこの場所に來たことがあるんだよ。莊子が胡蝶になった夢を見た場所だ。あの金色の蝶をご覧よ、わたしは前に夢の中であれを見たよ」

「またそんなこと言つて！　ちよつとお尋ねしますけど、あなたは莊子ですか、それとも胡蝶ですか？」

「フフ。莊子は自分が胡蝶なのかどうかわからなかったし、胡蝶も自分が莊子なのかどうかわからなかったんだよ」

雪瑛も楽しくなつて、子どものころのように致庸の頭をポンと叩いた。

「莊子ですら自分が胡蝶かどうかわからなかったんですもの、莊子の徒であるあなたは、やっぱり山西祁県喬家堡の喬致庸なのよ！」

致庸は雪瑛の頭をポンと叩き返した。

「ちがうよ、まさか莊子は喬致庸じゃないなんて言う気じゃないだろうね？　そして喬致庸は莊子じゃないとでも？　天下にはね、喬致庸の数だけ莊子がいるのさ。そして莊子の数だけ胡

蝶の夢があるんだよ——」

雪瑛は笑つて遮つた。

「わかつたわ、ご高説はたくさん！　話してちょうだい、このところお従兄様とお嫂様に閉じこめられていた間に、歴代の科挙の答案や天下の八股文をみなお腹の中に呑み込んでしまったの？」

致庸は鼻で嗤つた。

「言つておくけどね、わたしが読んだのは『閑閑たる雉鳩は河の洲に在り。窈窕たる淑女は君子の好速』(詩經)の類だよ」

雪瑛は赤い顔で押し黙ると、花を摘みに駆けだして行つた。致庸は追いつくと再びしかつめらしく言つた。

「わかつたよ。わたしが読んだのはこういう類の答案だ。よく聞いておくれ。『静女なる其の妹、我を俟つ城の隅。愛すれど見えず、首を搔きて跣躑す。』」

雪瑛がうっとりしているのを見て致庸は声をあげて笑いだした。

「ハハ！　つまりさ、きみみたいな綺麗な娘が、城門の陰でわたしのことを待っているんだ。その娘はとつてもわたしを愛しているのに、会いに来てはくれないから、気が急くあまり耳や頬を搔きむしるつて、ことだよ」

「ばか言つて！　科挙を受けようかという人が四書五経(四書と五経。儒教の基本書)も読ま

ずに、そんなつまらない本ばかり読んで！」
致庸はてんで気にせず、雪瑛の小さな手を握りしめて再び暗唱した。

「手は柔美の如く、肤は凝脂の如し、額は螭螭の如く、齒は麋犀の如し。螭首蛾眉、巧笑倩たり、美目盼たり……」

言いながら致庸は雪瑛の顎をすくあげ、深い情が滾々と湧いてくるのを感じた。

「ほら、そのひとつの手は茅草のように白くて柔らかいんだ。皮膚の色は凝り固まった脂肪のようなんだ。首はコガネムシの幼虫のように真っ白でそして長いんだ。齒もやっぱり瓢箪の種のように真っ白なんだ。それに広い額と美しい蛾眉を持っていて。笑うとかわいいえくぼができてね、その美しい眼差しときたら、ほんとにうっとりしてしまふんだ。雪瑛、わたしがこれを暗唱する時、思うのはいつもきみのことだよ！」

雪瑛は感動のあまり、そつと致庸の懐に身を寄せると、ぼろりと涙がこぼれ落ち、喉をつまらせた。

「致庸、なぜだかわからないけど、わたし怖い。今回の郷試の後は会試や殿試があつて、ほんとうに状元に合格したら、都にはあんなにたくさん偉いお役人やらお金持ちのお嬢様がいるんだもの。それでも祁県に戻ってきてわたしをお嫁さんにしてくれる？」

致庸はそつと雪瑛の背中を叩いてなぐさめた。

「雪瑛、貧賤の交わりは忘るべからず、糟糠の妻（糟糠とは酒かすと米ぬかで、そまつな食べ物を目指す糟糠の妻とは貧しい時代を共に苦労した妻のこと。）は堂より下さず、つて言うだろ。きみ以外の娘さんなんか娶つたりするものか。わたしはね、わたしたち二人の一生の計画までちゃんと立てているんだよ」

雪瑛は泣きつ面に笑みを浮かべた。